競技スポーツにおけるアスリート育成に関する一考察
A study on athletic training in competitive sports

1K05B048　　岡田　悠佑
指導教員　主査　友添秀則先生　　副査　寒川恒夫先生

【動機】
　私は、これまでの大学での勉強のなかで、ドーピングの例のように、競技スポーツにおける勝利至上主義という考え方が様々な問題の根源にあることを知った。そして、現状としては、勝利至上主義の蔓延により、勝てるアスリートをつくるというところまできているように感じられ、それは競技団体が行うアスリート育成の現状からみることができるのではないかと考えた。そこで、本論文ではアスリート育成に注目し、競技スポーツにおける勝利至上主義を考えたい。

【目的】
・各競技団体が行うアスリート育成の実態を明らかにし、その問題点を抽出する。
・競技スポーツにおけるアスリート育成のあり方を考察する。

【方法】
・本研究は文献の講読による。

【序章】
・序章では、本研究の動機、目的、方法、用語の説明、限界を述べる。

【第１章　競技スポーツにおけるアスリート育成の実態】
・第１章では、競技スポーツにおけるアスリート育成の実態をいくつか例をあげて、その概要をまとめた。その際、特にサッカー協会が行うアスリート育成システムは、協会がその方針等を細かく提示していることから、歴史的背景とともにより詳しく扱った。

【第２章　競技スポーツにおけるアスリート育成とエリート教育】
・第２章では、第１章であげた例のなかの、サッカー協会が行うサッカーのエリート教育に注目し、その実態を明らかにした。その際に、エリートという言葉の意味や使われ方に注目し、また、英才教育や才能教育などの言葉との関係から、サッカーのエリート教育とは何かを明らかにした。そして、それは、本来の意味でのエリート教育というよりは、単によりよいサッカー選手をつくっていく英才教育であることがわかった。そして、そこからも競技スポーツにおける勝利至上主義の一端をみることができた。

【第３章　競技スポーツにおける勝利至上主義】
・第３章では、第１章、第２章で明らかになった、アスリートの育成の実態の根底にある勝利至上主義という考え方への批判的考察を行った。競技スポーツにおける勝利の追求を前提としながらも、勝つためには何でもありという現状には改善すべき点があり、それを提示した。その際、アスリート育成における勝利至上主義を批判的に考察するために、勝利至上主義の延長上にある問題としてドーピングを例にとり、その批判要因を検討した。

【結章　まとめ】

・結章では、アスリート育成の現状やその根底にある勝利至上主義という考えへの批判的考察をふまえ、その解決策として、子どものスポーツ環境としての生徒の自主的、自発的な参加により行われる運動部活動の充実をあげた。それは、アスリートであろうがなかろうが、スポーツに対する考え方を深める場としての運動部活動の必要性からである。そのため勝利至上主義を志向する競技団体が行うアスリート育成の場ではなく、運動部活動を通して、子どもがスポーツを経験していくことが、アスリート育成の場としても適切なのではないだろうか。